OTSU CITY MUSEUM OF HISTORY

大津 歴博 だより

2002
No.46

企画展

よみがえった文化財

― 近年の修復の成果 ―

5月1日(水)～6月9日(日)

重要文化財　絹本著色不動明王二童子像　一幅　明王院蔵（写真　株式会社岡墨光堂提供）

大津市歴史博物館

企画展

「よみがえった文化財
―近年の修復の成果―」

大津市内に所在する文化財の件数は、京都市、奈良市に次いで全国で第三位となっています。それらは、先人から大切に受け継がれてきたものばかりであり、貴重な文化遺産ともいうべき文化財を、良好なかたちで後世に伝えるため、保存のための修復が定期的に実施されています。

本展では、市内所在の国・県・市指定文化財のうち、近年修復が完了した文化財を、絵画・彫刻・工芸・古文書の各分野から選んで公開します。それとともに、修復の工程を写真パネルや図表などで紹介することで、文化財保護に対する理解を、より深めていただくことも目的としています。

展示品は国宝二点、重文二点を含む全十六点。次に、主な作品を紹介します。

●**「絹本著色不動明王二童子像」一幅**（明王院蔵、写真は表紙参照）

不動明王を大画面にのびやかに彩色鮮やかに描く大作。瑟々座に坐し、二童子を配した不動明王としては最古のものと考えられています。（重文）

●**「越中国官倉納穀交替記残巻」一巻**（石山寺蔵、写真左ページ）

延喜年間（九〇一～九二三）頃の作成で、越中国司の交替に際して官倉（正倉）の穀物の保管状況を検査したときのもの。この記録が不用になり、反古紙として石山寺の写経所に納められたことから、写経の紙背文書として偶然に残ったのです。本紙の折れや虫損がはげしく、また軸装も簡易であったため、平成一一～一二年度にかけて修復が実施されました。（国宝）

●**「木造聖観音立像」一躯**（九品寺蔵、写真）

本像は、十世紀末に近江で流行した天台様式の典型的な作風を持ち、近年注目を浴びている像です。修理前は、両手を屈臂していたのですが、他の作例等を参考に右腕を垂下するよう変更しました。さらに、後補の表面を落とすことによって、シャープな十世紀らしい彫口が蘇りました。（県指定）

●**「四宮祭月宮殿山飾毛綴」**（上京町月宮会蔵）

ベルギー・ブリュッセルで十六世紀に作られたタペストリーを、文化四年（一八〇七）に入手し、曳山の見送幕にしたものです。最近傷みがすすんだため、原産地であるベルギーで復元新調されました。（重文）

●その他の主な展示品

○国宝「周防国玖珂郡玖珂郷延喜八年戸籍残巻」一巻　石山寺蔵
○市指定「絹本著色不動明王像」一幅　個人蔵
○市指定「木造狛犬」一対　若松神社蔵
○市指定「大津祭龍門滝山幕」一枚　太間町蔵
○市指定「板絵著色武者騎馬像」一面、佐久奈度神社蔵

滋賀県指定文化財
本造聖観音菩薩立像　九品寺蔵

●観覧料

一　般　四〇〇円（三二〇円）
高・大生　三〇〇円（二四〇円）
小・中生　二〇〇円（一六〇円）
＊（　）内は、前売り、団体（一五名以上）、市内在住の六五歳以上の方・障害者の方の割引料金

国宝　越中国官倉納穀交替記残巻　一巻　石山寺蔵（写真 有限会社坂田墨珠堂提供）

常設展示案内

「本堅田村一覧図」

本館蔵

大正六年（一九一七）旧堅田町に寄贈されたこの作品は、かつて堅田に居住していた西片氏の旧蔵と伝えられる、江戸時代後期の作品です。

山側から湖を見下ろす視線で、浮御堂から今堅田まで、つまり南から北に向かって描いた二・四メートルの絵巻です。この視線は、室町時代後期の堅田を描いた「堅田図」（静嘉堂文庫美術館所蔵）と一致し、町並みが湖岸に続く堅田を描こうとすると、必然的に採られる構図なのでしょうか。

本作品には、堀で囲まれた当時の町並みや橋・道・木戸門などの様子、人々が活動している姿も描き込まれています。とくに元禄一一年（一六九八）以降明治初頭まであった「堅田藩（のち佐野藩）陣屋」が描かれているのが注目されます。伊豆神社北側から現在の堅田港付近の堀まで、湖側に広大な敷地をもつ陣屋が位置していました。建物は湖側以外塀で囲まれ、北西側にある裏門につづいて二棟の大きな建物が描かれています。湖岸に祠も見え、これは現在岡本医院横にある都久生（つぐぶ）須麻（すま）神社に当たるようです。表門は浮御堂側に位置し、建物までの長い道の両側に、水田が広がっていた様子が伺えます。

裏門の前には高札場があり、現堅田港付近の堀には丸子船が五艘係留され、堀に渡された橋も太鼓状の立派なものです。このあたりが本堅田村の中心だったのでしょう。

現在の姿と比較して見ていくと、興味の尽きない作品です。

「本堅田村一覧図」に描かれた堅田藩陣屋（部分）

第24回ミニ企画展

大津の遺跡シリーズ2

滋賀里遺跡

■平成14年4月9日(火)～6月9日(日)

滋賀里遺跡は昭和二九年の発掘調査で初めて明らかになった遺跡で、その後に行われた湖西線建設に伴う発掘調査（昭和四六・四七年）により、縄文時代晩期の墓地跡と貝塚などが発見され、同時代を代表する遺跡としてよく知られています。墓地は土壙墓と甕棺、合わせて八〇基余りからなり、人骨も幾例か残っていました。これらの遺構とともに、当時の土器や木製品などの生活用具類が大量に見つかっており、本展では、これらの出土品や遺構写真から、遺跡の姿を紹介します。

滋賀里遺跡出土　縄文土器　滋賀県立安土城考古博物館蔵

◇◆◇◆ 講座インフォメーション（4月から6月まで）◇◆◇◆

4月13日(土)	徒歩一日健脚コース	ふるさと大津歴史教室	琵琶湖疎水をたどる
○三保が崎取水口－小関越え－蹴上インクライン－南禅寺水路閣			
4月20日(土)	13:30から15:00	ミニ企画展関連講座	湖西線関係遺跡発掘調査と滋賀里遺跡
○湖西線建設に伴って実施された発掘調査の様子と、それにより明らかになった滋賀里遺跡の概要を紹介します。 講師：松浦俊和（本館学芸員）			
5月4日(祝)	13:30から15:00	企画展関連講座	文化財を守るために
○博物館の展示室は暗いと思われたことはありませんか。今回の講座では、文化財の保存と公開という相互する博物館機能を両立させるための原則や工夫を中心にお話しします。 講師：山崎和宏（本館学芸員）			
5月11日(土)	10:00から11:30	第90回親子歴史講座	石器をつくる
○高島町で産出する石で古代の人たちが使っていた石のやじりや短い剣を作ってみよう！ 講師：松浦俊和（本館学芸員）			
5月18日(土)	13:30から15:00	企画展関連講座	曳山懸装品の修復
○大津祭はじめ祇園祭などでも、曳山を飾る懸装品（幕類）が次々と修復・新調されています。その技術的な現状を紹介します。 講師：藤井健三（京都市染織試験場　研究担当課長）			

第25回ミニ企画展

新知恩院の十六羅漢図

■平成14年6月11日(火)～7月14日(日)

新知恩院は、京都の浄土宗総本山知恩院が、応仁の乱で大津市伊香立に疎開し建立された寺院です。京都に戻った後も寺院は残り、仏画を中心に今でも多くの寺宝が伝来しています。今回はその中でも、大津市指定文化財絹本著色十六羅漢図を紹介します。

本図は画面中央に羅漢を大きく一人ずつ、一六幅に一六人を描いています。侍者や背景描写を少なくした画面構成やその図像は、この時期に流行したいわゆる李龍眠様といわれており、肥瘦のある力強い線描、写実的な表現から、南北朝期の典型的な羅漢図の一つといえます。

本展では、一六幅全てが揃う貴重な十六羅漢を一堂に展示する予定です。

大津市指定文化財　絹本著色十六羅漢図　第十五尊者

◇◆◇◆ 講座インフォメーション（4月から6月まで）◇◆◇◆

5月25日(土)	13:30から15:00	企画展関連講座	不動明王画像の修復
○表装という伝統技術と現代の科学知識を導入した修復技術を駆使して、歴史的に重要な絵画作品（不動明王画像）がどのように修理をされたのかをご紹介します。 講師：岡泰央（株式会社岡墨光堂　総務部課長）			
6月1日(土)	13:30から15:00	企画展関連講座	観音菩薩立像の修復
○国宝修理所で修復された木造の観音菩薩立像について、作業するにあたって気をつけたこと、その苦労話など、文化財修復の生の声をお話しします。※漆作業の実演あり。 講師：飯田雅彦（財団法人美術院　修復部長）			
6月8日(土)	13:30から15:00	近江の仏像④	不　動　明　王
○「お不動さん」として慣れ親しまれている不動明王について、その発祥であるインドや唐における信仰等に触れ、その淵源を概観したうえで、わが国で発達した様々な不動の造像の実態に迫ります。 講師：山岸公基（奈良教育大学助教授）			
6月15日(土)	10:00から11:30	第91回親子歴史講座	切り紙で作る世界の遺跡
○一枚の紙に切り込みを入れて折るだけで、世界遺産の遺跡が立ち上がります。一緒に挑戦してみましょう。 講師：横谷賢一郎（本館学芸員）			
6月22日(土)	13:30から15:00	近江の仏像⑤	釈　迦　如　来
○仏像のおおもと、「釈迦」に関する美術に触れ、仏教、仏像を理解するとともに、そこから派生した様々な仏教美術のバリエーションを見ていきます。 講師：寺島典人（本館学芸員）			

※諸般の事情により、内容が変更される場合があります。
※いずれの講座もハガキで、お申込みください。
※参加証の発送は、講座申込み締切り（10日前）以降となります。
通知がない場合は、恐れ入りますが、当館までお問い合わせください。

収蔵品紹介 39

大津絵図帖　楠瀬日年画　紙本版画　本館蔵　大正九年（一九二〇）

現在、巷では様々なテレビ・雑誌のキャラクターが流行しています。とりわけ、親近感を抱かせる漫画・アニメキャラクターの人気ぶり（海外においても）は、事情通ではない人間でも一目置くものがあります。ところで、大津絵に登場するキャラクター（画題）とこれらのキャラクターは、そのユーモアや、親しみ易さにあふれた姿や表情で描かれているといった点をはじめ、合い通じる点がいくつもあります。

そもそも大津絵は、現代でこそ、大津が生んだ民画（その土地で育まれた土着的絵画）であり、旧東海道の土産物という歴史的位置付けをされていますが、商業キャラクターの道を歩んだという側面もありました。大津絵の性格が、時代とともに変動したのはその状況証拠ともいえます。すなわち、初期の仏画から、当時の民衆の気質を反映した風刺や諧謔が込められた道訓物へと展開し、そして、さらに日常生活のニーズがある、魔除け・吉祥・開運・縁起物といった護符にゆきついたという具合にです。そして、その普及の結果として、様々な大津絵キャラクター製品（根付、印籠、陶器、干菓子など）も生まれました。

大津絵の販売や人気を支えていたのは、旧東海道が旅のルートとして賑い、その通行者が多かったからに他なりません。そのため、明治時代に入り、鉄道が開通し、街道が過去の遺物になってしまうと、必然的にその条件を失ってしまいました。こうして、大衆の間で流行したキャラクターが、その人気の衰えとともに、家庭からいつのまにか姿を消してしまうように、大津絵も急速にこの世から消滅したと思われます。かつて流通した模様に比較して、現代に伝わった江戸時代の大津絵は、ごくわずかでしかありません。

その状況は、すでに大正時代において深刻だったようです。この「大津絵図帖」も、その危機感を抱いた楠瀬日年なる人物が、広く好事家を訪ねて一〇〇点近くも模写し、後世に伝えるため制作した大津絵画題集であることが、彼のあとがきから判明します。この時点で、もはや大津絵は大衆のものではなくなり、希少品として好事家の収集対象となっていたことがわかります。もっとも、大津絵に惹かれる人々は依然として絶えず、画家や趣味人が描く我流の大津絵は、近代以降も少なからず見受けられます。

「大津絵図帖」も、そのような状況のなかで、我流大津絵のお手本として活用されたようです。昨年秋に開催された当館の企画展「知られざる日本絵画　シアトル白澤庵コレクション」に出品された、若狭物外の「大津絵九種図」（一九四七）に見るにぎやかな大津絵キャラクターの大集合は、「大津絵図帖」を母体に生み出されたものでした。（横谷）

大津絵図帖　右上より
雷と太鼓、弁慶、大黒と外法の川渡り、瓢箪鯰

若狭物外
大津絵九種図
（白澤庵コレクション）

大津市歴史博物館
〒520−0037　大津市御陵町２−２　☎(077)521−2100
ホームページ　http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp